

(甲種)

論 文 要 旨

学 位 論 文

表 題 本邦の歯科診療における抗菌薬処方の特徴と経時変化に関する研究

申 請 者 氏 名 平山果歩

担当指導教員氏名 畠山修司 教授

所 属 自治医科大学大学院医学研究科  
地域医療学専攻  
地域医療学専攻分野  
地域医療学専攻科

使用文字数 1,616 字

## 論 文 要 旨

氏名 平山果歩

### 表題

本邦の歯科診療における抗菌薬処方の特性と経時変化に関する研究

### 1 研究目的

抗菌薬の適正使用は世界全体で取り組むべき公衆衛生上の重要課題である。本邦の歯科診療における抗菌薬処方について、薬剤耐性対策アクションプラン(2016-20)の成果を評価し、残された課題を明らかにするため、2つのデータベースを用いて抗菌薬処方の経時変化を記述し、多方面から適正使用の実態を検証した。さらに、HIV感染症は世界で最も重要な公衆衛生上の問題の1つであり、HIV感染者の生命予後が長くなる中で、HIV感染者のプライマリケアがますます重要となっていることから、HIV感染者に対する医療の網羅的解析の一環として歯科抗菌薬について調査した。

### 2 研究方法

まず岐阜県の国民健康保険・後期高齢者医療制度加入者のレセプト情報(2015-19年度、約80万人)を用い、歯科から処方された全抗菌薬を集計した。また、抜歯時の予防的抗菌薬について処方の有無や種類、処方日数を解析した。次にナショナルデータベースである匿名レセプト情報・特定健診等情報(NDB)を用い、2015-20年度に歯科から処方された全ての経口抗菌薬を集計し、医療機関の属性(病院、クリニック)や都道府県による地域差を解析した。さらに、HIV感染者に対する抗菌薬処方を解析した。

### 3 研究成果

歯科で処方される抗菌薬は2015-20年の6年間で6%減少した。第3世代セファロスポリンは減少傾向ではあるものの2020年でも過半数(52.3%)を占めていた。ペニシリンは124%増加したが、2020年でも全処方の23.3%にとどまっていた。病院では第3世代セファロスポリンが急激にペニシリンに置き換わっていたが、クリニックではその変化は小さかった。都道府県別の解析では、最大で1.8倍の処方率の差が観察された。HIV感染者における抗菌薬処方率は非感染者と比較してやや低く、2015年度と2020年度でそれぞれ0.91倍と0.97倍だった。

抜歯時の予防的抗菌薬は2015-19年度の5年でアモキシシリンが3.5倍に増加したが2019年度でも予防的抗菌薬の17.1%にとどまり、非第1世代セファロスポリンが最多(68.0%)だった。また、予防的抗菌薬の87.8%が抜歯当日の処方で、79.2%が3日以上処方されていた。感染性心内膜炎のハイリスクである人工弁患者の21-37%に予防的抗菌薬が処方されていなかった。

### 4 考察

(甲種)

歯科において AMR アクションプラン(2016-20)の成果目標は達成されず、諸外国と比較して第3世代セファロスポリンの処方は依然として多い。HIV 感染者の口腔健康状態は、非感染者より不良であることが多いため、本邦の HIV 感染者にも unmet dental needs が存在することが示唆される。抜歯時の予防的抗菌薬は抜歯前の単回投与が推奨されており、セファロスポリンの処方が多いことに加え、3日処方が多いことも課題である。

## 5 結論

2023年に更新された AMR 対策アクションプラン(2023-27)の目標を達成するには、さらなる抗菌薬適正使用の促進が必要であり、歯科領域でも対応を強化する必要がある。特に歯科クリニックに対する介入の実施が効果的であると考えられる。さらに、適正な抜歯時予防的抗菌薬の使用に向け、歯科医師によるリスク患者の適切な把握に加え、弁置換術に関わる医療者による患者および家族に対する予防的抗菌薬の必要性の啓発等、包括的な対策が必要である。